

Klaus Abels:
Phases: An Essay on Cyclicity in Syntax

Berlin: Walter de Gruyter, 2012. vii + 323pp

松元洋介

1. はじめに

極小主義プログラムの枠組みの統語派生においては、統語部門からインターフェイスへの転送はフェイズを単位として進むと仮定されている。このように統語部門外の観点からフェイズという概念は極小主義プログラムにおいて中心的役割を果たしてきた。これに対し、本書は統語部門内の観点からフェイズの中心的役割を追及していくことを目標としている。具体的には、本書では連続循環移動、随伴、二次的移動、部分的wh移動、残留といった移動が関与する統語現象はフェイズの特性によって統一的に扱うことが可能であるという主張がなされている。

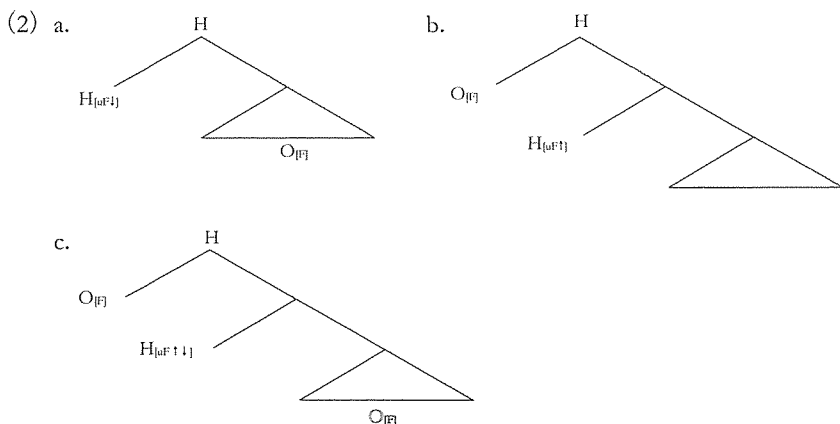
本書の構成は以下の通りである。1章には上記のような本書の目標およびそれに対する主張が簡潔にまとめられている。2章では連続循環移動について、3章では随伴、二次的移動、部分的wh移動について概観している。4章と5章では、それぞれ2章と3章で概観した特性に対する理論的説明が与えられている。6章はフェイズ主要部の補部の残留について議論が展開されており、7章は前置詞残留についてさらなる考察が加えられている。8章は結論である。

以下の節では、著者が採用する理論的枠組みを概観し、それによって上記の移動が関与する現象の特徴がどのように捉えられるかをまとめた後、本書の評価について言及したい。紙面の都合上、部分的wh移動、随伴、残留の事例のみを扱う。

2. 理論的枠組み

素性の値付与は素性共有を介して行われるという仮定の下 (cf. Pesetsky and Torrego (2007)), 著者は値未付与の素性を素性共有が成立する統語的配置によって三種類に分類している。各素性と共有の統語的配置は、それぞれ (1) と (2) にまとめられている。ここで統語関係 (syntactic relation) はC統御により築かれるものとする。

- (1) a. $[uF_{\downarrow}]$: an unvalued feature that requires an downward syntactic relation with a bearer of $[F]$;
 b. $[uF_{\uparrow}]$: an unvalued feature that requires an upward syntactic relation with a bearer of $[F]$
 c. $[uF_{\uparrow\downarrow}]$: an unvalued feature that requires both an upward and a downward syntactic relation with a bearer of $[F]$



ここで注意すべき点は、移動はEPP素性ではなく主要部の持つ素性 ($[uF_{\uparrow\downarrow}]$) により引き起こされるということである。

著者は、極小主義プログラムの標準的な枠組みと同じようにフェイズ不可侵条件に基づき移動の連続循環性を導き出しているが、移動を引き起こすが解釈される必要のない素性を持つ、という (中間着地点の) フェイズ主要部の特性に注目することにより、以下で扱う移動が関与する現象の説明を試みている。

3. 部分的 wh 移動, 随伴, 残留

(3) のマラガシー語の例に示されるように, 一部の言語の wh 疑問文では, wh 句が元位置や文頭だけでなく埋め込み節の左周辺部に現れることがあり, その場合は部分的 wh 移動と呼ばれる。

- (3) Herverin' i Piera fa *inona* *no* nivity Rakako?
 believe ART Piera that what FOC buy Rakako
 'What does Piera believe that Rakoto?'

Focus marker の *no* が示すように, 部分的 wh 移動は一種の焦点化によるものである。部分的 wh 移動の (3) は (4) のような構造を持つと考えられる。

- (4) [CP-main C_[uWh ↓] ... [CP-embedded *inona no*_{[FOC-ru↓][Wh]} C_[FOC-ru↓ ↑] ... *inona no*]]

埋め込み節の C が持つ [uFoc ↓] との共有により CP 指定部へ部分的 wh 移動が引き起こされ, その場所で主節の C が持つ [uWh ↓] は共有される。

(5) に例示されるような随伴もまたフェイズ主要部の持つ特性により, その特徴を正しく捉えることができる。

- (5) I wonder [whose mother] you invited.

(5) の DP フェイズは (6) のような構造を持つ。

- (6) [DP *who*_{[Wh-ru↓][Case-ru↓]} [D' *se*_{[Wh ↓ ↑ -ru↓][Case ↓ ↑ -ru↓]} [NP *mother who*]]]

D の [uWh ↓] は *who* との素性共有により値が付与されている。それにもかかわらず, DP 全体は wh 句として機能し, 移動している。これは, フェイズ主要部 D の持つ素性が DP 内で解釈を受ける必要がないためであるからと著者は主張する。

また著者は, 同一投射内の補部から指定部への移動を禁じる反局所制約 (cf. Abels (2003)) と連続循環移動を要求するフェイズ不可侵条件から, (7) のような一般化を導き出している。

- (7) Stranding generalization:

Given a phase head H and a constituent X in H's c-command domain, the following configurations are respectively,

- a. possible to derive: [X ... [H [... Σ ...]] ...] and

b. impossible to derive: [X ... [H X] ...]

(7) によると、フェイズ主要部の補部を移動させることは許されない。本書では英語を含めた多くの他言語のデータから、フェイズ主要部 *v*, *C*, *P* については、(7) の一般化が当てはまることを示している。

4. 評価と展望

フェイズに基づき統語現象を説明している研究は少なくない。その中でも、本書は一見論理的関係のないさまざまな統語現象を統一的扱い、フェイズの中心的役割を追究することにひとまずは成功している。連続循環移動や部分的 *wh* 移動、随伴は全てフェイズ主要部の持つ素性により引き起こされている。今後多くの極小主義プログラムの研究に影響を与えることは間違いないだろう。

とは言うものの、本書の分析の仕方に全く問題がないわけではない。例えば、(7) の一般化をフェイズ主要部 *P* に当てはめると、前置詞残留は一般的に不可能ということになる。しかしながら、英語において前置詞残留が一般的であるということは明々白々の事実であり、本書の分析と矛盾する。これに対して、著者は前置詞残留が許される言語の *PP* の内部構造は、前置詞とその補部との間に空の形態素が主要部を占める投射が介在していると仮定する。これにより、前置詞の目的語の移動が反局所制約を引き起こさなくなる。しかし、そのような対処法はその場しのぎであると言わざるを得ない。

包括的な議論を進めつつも、以上のような個々の言語が抱える問題に対して原理に基づいた説明を与えていくことが今後の課題となるだろう。

惜しむらくは本書は誤植等が散見されることである。紙面の都合上、列举、指摘はしないが、本書の価値が損なわれないことを願う。

参考文献

- Abels, Klaus 2003. *Successive Cyclicity, Anti-locality, and Adposition Stranding*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

- Pesetsky, David and Esther Torrego. 2007. The Syntax of Valuation and the Interpretability of Features. In Simin Karimi, Vida Samiiian, and Wendy K. Wilkins, ed., *Phrasal and Clausal Architecture: Syntactic Derivation and Interpretation in Honor of Joseph E. Emonds*, 262–294. Amsterdam: John Benjamins.